取組項目 No.6　津波災害からの教訓の伝承と防災文化の醸成

〔取組概要〕

○ 岩手県には、度重なる津波被害によって多くの犠牲者を出してきた歴史があります。しかし、明治・昭和の津波の教訓が語り継がれ、防災文化として定着している地域があります。

○ 今回の東日本大震災津波では、その教訓が生かされ被害が最小限に抑えられた事例も多く見られました。

○ 岩手県釜石市では、従来から津波防災教育を推進しており、その基本となっているのが、三陸の言い伝えである「津波てんでんこ」の精神です。子どもたちは津波が来たときに一人でも「てんでんこ」に避難できるよう知識を学んでおり、今回の震災でも多くの命が救われました。

○ また、明治・昭和の津波で甚大な被害を受けた大船渡市三陸町吉浜地区では、一貫して低地では農業、漁業を営み、住居は高台に移すという方針で津波に備えており、今回の震災では被害を最小限に食い止めることができました。

○ 本県では、今後も再び襲ってくる災害に備え、三陸ジオパークの取組の推進や震災学習を中心とした教育旅行受入れなどにより、更なる防災文化の醸成（伝承、定着）に取り組んでいます。

取組事例 ①　津波防災教育の大きな成果について

津波防災教育の基本となっているのは、三陸の言い伝えである「津波てんでんこ」の精神です。津波が来たら、いち早く各自てんでんばらばらに高台へ逃げろという古くからの言い伝えです。

子どもたちはこの精神を学び、避難所マップづくりや避難訓練によって普段から防災意識を高めていました。

東日本大震災津波から高台に避難する
児童、生徒たち（平成 23 年３月 11 日）

津波てんでんこ

今回の東日本大震災津波での鵜住居小学校と釜石東中学校の児童、生徒たちの行動は、普段からの津波防災教育が実を結んだ一つの例となりました。

地震発生後、中学生は校庭に集合し全員で避難を開始しました。これを見て、校舎３階に避難していた小学生も続き、途中で遭遇した幼稚園児たちを助けながら学校で決めた避難場所に到着しました。しかし、裏の崖が崩れていることなどから危険と判断し、より高い場所にある介護福祉施設に避難しました。その後、巨大な津波が校舎を越えて迫ってくるのが見えたので、さらに高台にある国道 45 号線沿いの石材店まで駆け上がって全員が難を逃れました。津波は介護福祉施設の近くまで到達していました。

鵜住居小学校と釜石東中学校は浸水予測図では、浸水域外となっていましたが、海岸に近く、津波被害を受ける可能性が高いという認識の下、防災教育と合わせて様々な訓練を実施してきた積み重ねが児童、生徒たちの命を救ったと言えます。

取組事例 ②　高台移転が功を奏した大船渡市三陸町吉浜地区について

大船渡市三陸町吉浜地区では、1896 年（明治 29 年）の明治三陸大津波や 1933 年（昭和８年）の昭和三陸津波といった過去の津波被害を教訓に、一貫して、低地では農業・漁業を営み、住居は高台に移すという方針で、津波に備えてきました。

東日本大震災津波で被害を受けなかった
吉浜地区の高台

高台から見下ろした吉浜海岸

高台での生活は、漁業者にとっては高台の住居から浜までの移動距離が生じ、普段の生活の利便性は多少損なわれましたが、それでも吉浜地区は津波に備えることを最優先としてきました。

今回の震災で被害を最小限に食い止めることができた吉浜地区の事例は、過去の津波被害の教訓を生かした地域づくりの好例です。

取組事例 ③　三陸ジオパークの取組の推進について

平成 25 年９月に、日本ジオパーク認定を受けた「三陸ジオパーク」には、自然と文化のつながりや、震災の被害の大きさを物語る遺構など、壮大なスケールでジオを体感できる場所が数多くあります。

震災遺構
（津波により壊滅的な被害を受けた「道の駅高田松原」）

ジオパーク授業の様子

三陸ジオパークでは、自然との共生の在り方や地球活動の歴史と震災の記憶を後世に伝えるフィールド形成に向けて、小中学校でのジオパーク授業等を通じた防災教育や学校教育への活用の促進を図っています。

また、３県（青森・岩手・宮城）に跨る日本最大のジオパークとして、広域観光の推進につながる情報発信や教育旅行の誘致等にも取り組んでいます。